

The Holocaust in Minsk and the Jewish Resistance (1)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Nomura, Mari メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00053360

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ミンスクのホロコースト

—— ユダヤ人抵抗運動の成果と限界 —— (前篇)

野 村 真 理

目 次

- I はじめに
- II ベラルーシ人とユダヤ人
- III 独ソ戦開戦とゲットー抵抗運動の組織化
 - 1. ミンスク占領
 - 2. ゲットー抵抗運動の組織化
- IV ユダヤ人虐殺の進行
 - 1. 1941年11月アクション
 - 2. ドイツ・ユダヤ人ゲットー
 - 3. 1942年3月アクション
- V パルチザンとユダヤ人
- VI ミンスク・ゲットーの最後 —— おわりにかえて

(以上、本号掲載)

I はじめに

1941年6月22日、ナチ・ドイツは独ソ不可侵条約を破棄し、「ユダヤ＝ポリシェヴィキ」の殲滅をめざして独ソ国境を越えた。とはいえこの国境は、1939年8月の独ソ不可侵条約に付随した秘密議定書にもとづき、両国が勝手に取り決めた境界にすぎない。ドイツ軍がまず侵攻したのは、住民の合意なくしてソ連に組み込まれたリトアニアやラトヴィア、あるいはポーランドの東部領域であった。そこでドイツ軍は、ソ連支配に反感を抱く住民に対してユダヤ＝ポリシェヴィキからの解放者を名乗り、住民がそのようなものとして彼

らを出迎えることを期待し、住民の歓迎をみずから工作しました。

実際、両大戦間期リトアニアの首都カウナスやラトヴィアの首都リーガ、また東ガリツィアの最大都市ルヴフで、ドイツ軍は住民の歓呼と花束によって迎え入れられる。それと同時にこれらの都市で発生したのが、共産主義者とユダヤ人の一掃を求める一般住民の「自己浄化運動」としてのポグロムであった¹⁾。このポグロムで積極的あるいは誘導的な役割をはたしたと考えられているのは、リトアニアについてはリトアニア人行動主義戦線(略称LAF)、東ガリツィアについてはウクライナ民族主義者組織(略称OUN)といった現地の反ソ・反ユダヤの民族主義組織である。彼らは、すでに独ソ戦開戦以前にナチ・ドイツとコンタクトを持っていた。

しかし、ドイツ中部方面軍がポーランドとベラルーシ・ソヴィエト社会主義共和国の本来の国境を越えたとき、もはや状況は同じではありえなかった。6月23日に首都ミンスクの空爆を開始し、27日の未明、中心部が瓦礫の山と化した街に入場を開始したドイツ軍は、現地住民にとって侵入者でしかなかった。中部方面軍に同行した特別行動隊Bの隊長アルトゥール・ネーベは、1941年7月9日から16日までの週間活動報告で述べる。「ユダヤ人人口があまりにも多く、またベラルーシ人が無気力、無関心であるため、ユダヤ人に対するポグロムを始動させることはほとんど不可能である²⁾。」ベラルーシに足を踏み入れた特別行動隊員にとって、彼らのポグロム挑発に全く反応しない住民の態度は「驚くべきもの」だった。彼らが観察するところでは、住民はユダヤ人を好いているわけではないらしいのだが、ユダヤ人迫害には理解を示さず、それどころか、ときに巷では、ナチによる迫害を「非人間的」と言ってはばからない者さえいるというのだ³⁾。実際、回想記等を読めば、住民は、独ソ戦が長期化するにつれて苛酷さを増した食糧や資源、労働力の収奪、ソ連兵捕虜に対するドイツ軍の虐待行為やユダヤ人殺害を目の当たりにして、ナチの支配に敵意を募らせ、ユダヤ人の運命は明日の自分たちの運命と感じていたことが見て取れる。

第II章で述べるように、ベラルーシは、ロシアでユダヤ人に対するポグロムが頻発した帝政末期からロシア革命の混乱期にも、皆無ではなかったにせよ、ポグロムがほとんどなかった地域として知られる。では、そのベラルー

シの首都ミンスクで、ホロコーストはいかなる経過をたどったのか。

ミンスクは、ワルシャワ、ヴィリニウス、カウナス、ビャウイストク等と同じく、ユダヤ人によって有力な抵抗運動が組織されたゲットーの一つである。そのさい、他の都市と異なるミンスクの特徴は、ユダヤ人と非ユダヤ人の抵抗運動との連携、さらに森に潜む対ドイツ・パルチザンとの連携がある程度成功し、それがゲットーのユダヤ人の救出に繋がったことに求められる。本稿では、この連携の成果と限界に着目しつつ、ミンスクのホロコーストの展開を追う⁴⁾。

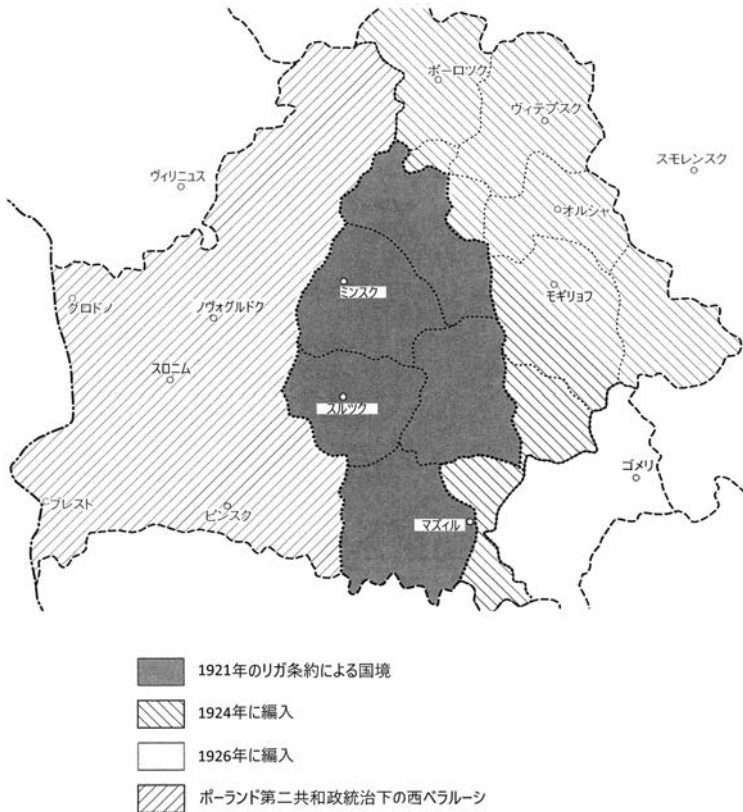
II ベラルーシ人とユダヤ人

本論に入る前に、いくつか断っておかなければならないことがある。

ベラルーシ語を母語とする人々をベラルーシ人とするとき、帝政ロシア末期にベラルーシ人が集中して居住していたのは、ほぼヴィリノ(リトアニア語称ヴィリニウス)、ヴィテプスク、グロドノ、ミンスク、モギリョフの5県がカバーする地域であった。そこに、歴史上はじめて国名にベラルーシを冠する国家、すなわちベラルーシ人民共和国の創設が宣言されたのは1918年3月であり、さらに数度の変更を経てベラルーシ・ソヴィエト社会主義共和国の国境が確定したのは1926年末である。しかし、1926年末の同国は、上記5県がカバーする地域のほとんど東半分しか領有しておらず、西半分はポーランド領であった。このときベラルーシ国境外に取り残されたベラルーシ人の問題を解決したのが、ほかならぬ1939年8月の独ソ秘密議定書にもとづくポーランド分割である。これによってベラルーシ人が居住するポーランド東部領域は、ベラルーシ・ソヴィエト社会主義共和国に併合された。第二次世界大戦後の同国とポーランドの国境は、ほぼこの時の分割線に従う。(地図1)

以上の歴史的経緯から明らかなように、現在、西ベラルーシと呼ばれる1939年の併合地域と、1926年末の国境がカバーする東ベラルーシとは、両大戦間期は全く体制の異なる国家に属しており、東西ベラルーシでユダヤ人の歴史的経験も大きく異なる。そのため1945年の第二次世界大戦終結までを扱う本稿では、たんにベラルーシと記す場合、特に断らないかぎり1926年末の

ベラルーシの国境（1921～1945年）



早坂真理『ベラルーシ—境界領域の歴史学』（彩流社，2013年）20ページより筆者作成

地図 1

ベラルーシ・ソヴィエト社会主義共和国の領域をさすことにする。また、ベラルーシの地名や人名は、原則的にロシア語称で表記した。

さて、14世紀後半以降、リトアニア大公国の東部辺境をなし、18世紀末のポーランド分割以後はロシア帝国の西部辺境であったベラルーシ人の居住地域は、地味に乏しく、森林のほかには天然資源にも恵まれず、近代にいたるまで経済的豊かさとは無縁の農業地帯であった。それぞれ上記5県を構成す

る郡のなかからベラルーシ人人口が多数を占める郡を選び出し、さらに隣接するスモレンスク県、チェルニヒフ県から同じくベラルーシ人人口が多数を占める1郡ずつを加えた合計41郡について、1897年のロシア帝国統計を用い、ベラルーシ人の居住状況や使用言語、職業分布を分析したグゼアの研究によれば、ベラルーシ人の実に98%が人口2000人以下の村落部に住み¹⁾、92%が農林業や狩猟、漁業で生計を立てていた²⁾。農村では、土地は少数のポーランド人あるいはロシア人の地主に集中し、ベラルーシ人のほとんどは貧農である。都市居住者が少ないこととも関連して、上記5県の10歳から49歳までのベラルーシ人の識字率は22.4%にとどまり、非ベラルーシ人の51.5%に比べて著しく低い³⁾。

民族運動の担い手となりうる中間階層が欠如したベラルーシ人のなかで、高等教育を受けた一握りの知識人のあいだに、ベラルーシ人が独自の民族を構成するという意識、すなわちベラルーシ民族意識が芽生えるのは19世紀末になってからである。隣接するウクライナでは、一足早く19世紀はじめに民族意識に目覚めた知識人が、ロシア帝国による弾圧を受けながらも19世紀末には見るべき民族運動を生み出した。第一次世界大戦中、1917年のロシア革命によってロシア帝国が崩壊すると、ウクライナ人は、翌1918年1月にウクライナ人民共和国の独立を宣言し、2月のprest=リトフスクでは、ドイツ、オーストリア=ハンガリー、オスマン帝国、ブルガリアの同盟国側と講和を締結するなど、国際的にも一定の存在感を発揮するにいたる。それに比べ、ベラルーシ人の影は薄い。ベラルーシ語は、独立した言語と認められるまでポーランド語方言ともロシア語方言とも言われ、第一次世界大戦期にいたっても、ベラルーシ語を話す多くの人々の意識は、ベラルーシ人でもポーランド人でもロシア人でもなく、ただ「この土地に住む者たち」であった。

1918年3月3日、ソヴィエト・ロシア共和国政府と同盟国のあいだでprest=リトフスク条約が締結されると、ドイツの支配下に入ったミンスクでは、イヴァンとアントンのルツケヴィチ兄弟ら、ベラルーシ人の自治を模索する民族派社会主義者が、3月25日、広くベラルーシ人の居住地域を版図としてベラルーシ人民共和国の独立を宣言する。当然ながら、この地域の支配者ドイツの支持を期待しての宣言であった。しかし、リトアニアのケースと

異なり、ドイツはベラルーシ人の国家設立に関心を示さず、彼らの動きを黙殺した。結局11月、ドイツの敗戦でドイツ軍が撤退すると、同地域の実権はポリシェヴィキの手に移り、ほとんど国民国家の体をなさなかったベラルーシ人民共和国の残党は西のリトアニア、ポーランドへと亡命した。

ポーランドにせよ、ウクライナにせよ、民族自決へと走った民族主義者が、異民族の排斥、自民族浄化主義に染まったことを考えれば、こうしたベラルーシ民族意識の未成熟や民族運動の弱さは、ユダヤ人にとって悪いことではなかった。

ロシア帝国は、1917年の革命にいたるまでユダヤ人解放が実現されなかった国家である。ユダヤ人の居住地は法によって指定されたユダヤ人定住地域に制限されたが、そこで農民を主体とするキリスト教徒の民衆と、ユダヤ教を信仰し、イディッシュ語というスラヴ系言語とは異なる言葉を話し、都市あるいは小さな町に集中してアレンダあるいは商業、職人業等を営むユダヤ人とは、数世紀にわたって居住地を共有しながら別世界に住む人々であった。キリスト教徒の民衆のあいだには、一般に、ユダヤ人に対して根深い宗教的偏見や、経済的利益相反に発する不信感が存在し、ユダヤ人蔑視は、正教会や国家の差別政策によって公認されてもいた。たとえばチェーホフの短編「ロスチャイルドのバイオリン」を読むとき、そこに登場するひよろひよろ瘦せたユダヤ人は、しがない棺桶職人から些細なことで「ニンニク野郎」と取り掛かれ、通りでは汚いガキどもから「ユダ公、ユダ公」とはやされ、けしかけられた犬に噛みつかれてゲラゲラ笑われるが、それは、作中人物の誰にとっても違和感のない日常だったことがわかる。ユダヤ人は、キリスト教社会の最底辺にいる者たちでさえ差別することが許される存在だった。

しかし、こうした日常がユダヤ人に対する民衆の集団的暴行、すなわちポグロムへと転化するか否かにおいて、定住地域南部に位置するウクライナと北部のベラルーシ人居住地では、大きな差が認められる。ウクライナでは、1881年春に発生した大規模なポグロムを皮切りとして、1905年革命前後の社会的混乱期には、ポグロムの波が抵抗の術を持たないユダヤ人を襲い、略奪、暴行、殺害をほしいままにした。このウクライナの惨状と比較するとき、後論との関係で特筆すべきは、両方でユダヤ人人口の密度に大差がないにもか

かわらず、ベラルーシ人居住地ではユダヤ人に対する集団的暴行がほとんどなかったことである。

1917年のロシア革命はユダヤ人に対する帝政時代の差別法を全廃したが³、反革命派によってポリシェヴィキ革命はユダヤ人の陰謀とする妄言が流布され、1920年まで続いた内戦中、ウクライナを中心に、ウクライナ執政府軍、白軍、コサック軍等に加え、匪賊、農民等による凄惨なポグロムが発生し、5万から20万人とも推定されるユダヤ人が殺害された。これに対してベラルーシ人の居住地では、ポグロムは皆無ではなかったものの、発生件数はごくわずかだった。内戦期にポグロムを引き起こしたのは、むしろ外から侵入したポーランド人である。1919年2月に始まるポーランド・ソヴィエト戦争のあいだ、同年8月8日から翌1920年7月11日までミンスクはポーランド軍の占領下におかれる。その間、ユダヤ人はポーランド人によってポリシェヴィキの支持者とみなされ、ユダヤ人に対する暴行が頻発し、特に1920年7月はじめのポーランド軍撤退時にピークに達した。他方で現地住民の参加は見られなかったという。7月11日にラビ、イエヘズケル・アブラムスキイは、ポーランド民族がみずからの国家独立をポグロムによって開始したことを嘆きつつ、ミンスクの惨状を次のように述べている。

「何たる悲惨。顔をあげる力もなく、荒れはてた通りを行く。破壊の下に埋もれているのは、流されたばかりの血、孤児の泣き声…少しでもポーランド軍が接した街や近郊のあらゆるところで盗みと殺害が起きた。人間によってかくも凄まじい犯罪が犯されるとは、世界の誰も信じまい。ポーランド国がその独立を中世以来のかくも恐るべき行為で開始するとは、そのようなことを信じる者などいるだろうか。上品に着飾り、ヨーロッパの礼儀を身に着けた人々が、[ウクライナの]ハイダマクのごとく振る舞い、殺し、盗み、ミンスクから逃げ出そうとする人間や馬や彼らの手荷物に向かって火を放つとは、これを信じることができる者などいるだろうか⁴⁾。」

ベラルーシ・ソヴィエト社会主義共和国の誕生は、それまでのユダヤ人の生活ならびにユダヤ人と非ユダヤ人の関係を根本的に変化させる。以下、ベラルーシの首都ミンスクについて、この変化を見ておきたい。

まず1897年の統計によれば、言語を指標とするミンスクの総人口9万912人の民族別構成は、ベラルーシ人9%、ロシア人25.5%、ポーランド人11.4%、

ユダヤ人51.2%であった⁵⁾。ソ連時代になると、人口調査はいずれも回答者に自身の民族的帰属を選択させたため、1897年の統計と同一指標で比較することはできないが、第二次世界大戦前夜の1939年1月の統計によれば、人口23万8948人の都市に成長したミンスクで、ベラルーシ人は12万4061人(51.9%)、ユダヤ人は7万998人(29.7%)となり、ミンスクはベラルーシ人の街へと大きく変化したことがわかる⁶⁾。ベラルーシ人人口の変化について言えば、これは、ソ連で1920年代を通じて推進された現地化政策、すなわちベラルーシのベラルーシ化政策と、農業の集団化に伴う余剰農業人口の都市への移動の結果の一つであり、他方、ユダヤ人人口の変化について言えば、小さな町から大都市ミンスクへの流入があった一方、若いユダヤ人を中心に、社会的上昇を求め、旧ユダヤ人定住地域の外へ、特にモスクワ、レニングラードという、ミンスクよりはるかに規模の大きな都市へと人口が流出した結果である。

1920年代のベラルーシでは、1924年7月15日の法で、ベラルーシ語、ロシア語、ポーランド語、イディッシュ語の4言語が平等な公用語とされたが、優先されたのはベラルーシ語である。ベラルーシ語による教育や文化振興が奨励され、また政府の諸機関では、ベラルーシ人が優先的に要職に登用された。革命前のミンスクでは、教育や公の場で使用を強制されたのはロシア語で、20世紀はじめまで農民の話し言葉であったベラルーシ語は、文法も未整備であった。それゆえ、こうしたベラルーシ化は人々に体制の転換を実感させ、それに反発を感じる人々にとって、ベラルーシズムとコミニズムは同義であった⁷⁾。

同じく人々に体制の転換を実感させたのが、ユダヤ人の社会的進出である。旧帝国の差別政策や、ロシア革命ならびにポーランド・ソヴィエト戦争中のポグロムを知る多くのユダヤ人にとって、社会主義国家の安定が安堵感をもたらしたことは否定できない。1928年にユダヤ人はミンスクの全大学生の37.4%を占め⁸⁾、高等教育を修めた者は、共産党諸組織の幹部や、政府、軍の要人あるいは学者や医師、技師等となり、社会主義国家建設に参加した。

ソ連は、1930年代半ばに一国社会主義のもとでのソ連愛国主義路線に転換するまで、革命的国際主義に基づく民族融和路線をとり、1927年はじめより工業、農業、公共部門で異なるエスニック・グループの協働を意図的に促進する。伝統的に農業とは無縁であったユダヤ人の農村や集団農場への送り込

みも行われた。しかしながら、これまで別世界で暮らしてきたユダヤ人と非ユダヤ人の協働は、農場でも、工場でも、公共部門でも、両者のあいだに軋轢を生じさせ、ときとしてユダヤ人を標的とする暴力沙汰まで発生した。かつて「ユダ公」と呼び捨てたユダヤ人を上司と仰ぐことは、価値観の転換についていけない者たちには受け入れがたいことだった。そのため政府は1928年末から、ショーヴィニズム批判の一環として反ユダヤ主義撲滅キャンペーンを行い、迂闊に「ユダ公」と口にただけで公安に引っ張られた。キャンペーンは1934年まで継続され、ようやく1936年2月に反ユダヤ主義の消滅が宣言される。しかし、こうした政府の宣言とは裏腹に、現場での反ユダヤ的トラブルは消えたわけではなかった。後論との関係でいえば、独ソ戦下のドイツ占領地で繰り広げられたナチの反ユダヤ・プロパガンダは、ソ連時代、表面的に抑え込まれていただけの反ユダヤ感情を一気に解放し、これが人々のホロコーストに対する容認的、無関心的態度に影響したとの見解も存在する⁹⁾。

しかし、先述したようにベラルーシでは、体制転換によってベラルーシズム＝コミュニズムという言説が生み出された一方、ウクライナと異なり、内戦期からその後を通じて、ユダヤ＝ポリシェヴィキ言説の流布が見られなかったことは注目してよい。とはいえ、もちろん、ロシアの首都モスクワやウクライナの首都キエフに比べ、ベラルーシの首都でありながらユダヤ人の人口比率が飛びぬけて高いミンスクで、ユダヤ人と非ユダヤ人の社会的統合が、摩擦なく速やかに進行したわけではない。ユダヤ人は、街の旧ユダヤ人街にまとまって住み続けたし、1930年代半ばのソ連の愛国主義路線への転換で少数民族言語政策もまた変わるまで、ベラルーシ語やロシア語の文化圏とは別個のイディッシュ語文化圏が確固として存在し、繁栄した。だが、それも、革命後に教育を受けた世代が成長すると、変化し始める。

1919年6月、ポリシェヴィキはヘブライ語を退け、イディッシュ語をユダヤ人の民族言語とみなし、ソ連のユダヤ人学校の教育言語に採用した。しかし、1926年の調査で5万3684人のユダヤ人人口(総人口の40.83%)が存在したミンスクで¹⁰⁾、両親や祖父母の多数はイディッシュ語の話者であったにもかかわらず、1924年1月に10校存在したイディッシュ語による小学校で学ぶ子供は2505人にすぎない¹¹⁾。ロシア語では教科書が充実し、教科教授法も確立

されており、言語的にロシア語に近いベラルーシ語の場合、それらのロシア語からの転用が可能であったが、イディッシュ語は、学術言語としてはいまだ実験的段階を抜け出ていなかった。そのため、将来のキャリアを考えればイディッシュ語教育校は魅力に乏しく、ユダヤ人の子供たちの多くがロシア語教育校を選択した。1930年代半ばにソ連の言語政策が、ソ連の共通語としてのロシア語と共和国の共通語としてのベラルーシ語重視へと転換され、1938年7月に、それまでイディッシュ語やポーランド語であった教育機関の言語がロシア語、ベラルーシ語に変えられると、ユダヤ人のロシア語化は決定的となった。

同じ教科書でソ連式教育を受け、同じ本を読み、同じ歌を歌い、コムソモールで連帯意識を高めながら育った世代の意識は、ロシア革命以前に青少年期をすごした両親や、まして多くが敬虔なユダヤ教徒であった祖父母の意識とは大きく異なる。若者のあいだでは、個人的な交際を通じてユダヤ人に対するステレオタイプの偏見も修正され、ユダヤ人と非ユダヤ人の結婚も増加した。1999年から2000年にかけて、ドイツのケルン市の市民団体「青年クラブ 勇気ケルン」がミンスクのホロコースト生存者12人に対して行ったインタビューの記録を読むと、たとえば1927年にミンスクで生まれたルーピンシュテインは、祖父母と両親はイディッシュ語の話者であったが、本人はロシア語教育校に通い、ロシア人、ベラルーシ人、ユダヤ人の子供たちと分け隔てなく遊んだという。ユダヤ人差別についてルーピンシュテインは、もしかすると両親はときどき何か感じていたのかもしれないと断りつつ、子供たちのあいだでは民族の違いが話題に上ることはなかったと述べている¹²⁾。同じく1927年にヴィテプスクで生まれたトレイステルの場合は、家庭で話されていたのはロシア語であったが、通ったのは自宅近くのベラルーシ語教育校だった。トレイステルもまた、少なくとも当時のミンスクの学校では、反ユダヤ主義撲滅キャンペーンが非ユダヤ人の子供たちの反感を掻き立てることなく、そのものとして機能していたと回想する¹³⁾。

彼らのようなホロコースト生存者のほとんどは、ロシア人やベラルーシ人から何らかの助けを得て生き延びた人々であり、しかも半世紀以上を隔てて語られる彼らの体験を直ちに当時のベラルーシのユダヤ人の状況一般として拡大解釈することには慎重でなければならない。しかし、両大戦間期ポーラ

ンドの都市で青少年期をすごしたユダヤ人の回想記のほとんどが、街頭や学校での生々しい反ユダヤ体験を語るのとは対照的といつてよいだろう。

Ⅲ 独ソ戦開戦とゲッター抵抗運動の組織化

1. ミンスク占領

1941年6月22日、ミンスクではコムソモール湖の完成式典が行われることになっていた。市内を流れるスヴィスロチ川の氾濫防止のため、足りない機器を手で補い、市民総出で造り上げた人工湖である。暑く晴れた日曜日で、子供や学生は早朝から式典会場に向かい、式が終われば湖で泳ぐのを楽しみにしていた。ところが、そのうち、ドイツ軍侵攻のうわさが流れ始める。ソ連外交の指導者モロトフがラジオで独ソ戦開戦を告げたのは、ようやく正午ごろだった。

ユダヤ人にとって運命のこの日、ミンスクにどれだけの数のユダヤ人がいたのか。第Ⅱ章で述べたように1939年1月の統計によれば、ミンスクのユダヤ人は約7万人であり、同年9月のドイツ軍のポーランド侵攻後、ポーランドから流入したユダヤ人難民を合わせて7万5000人から8万人との推定もあるが¹⁾、正確なことは不明である。開戦と聞くや、真っ先に逃走したのは、ドイツ軍の破壊力を知る難民たちだった。他方で一般住民は国家当局による疎開命令を待ち、ソ連育ちの若者は赤軍の無敵を信じて疑わず、戦闘は1週間で終わると楽観していた²⁾。人々は、ベラルーシ共産党第1書記のパンテレイモン・ポノマレンコの指示のもとで23日の夜、住民に優先して重要工場設備や原料、それらにかかわる専門労働者の疎開が開始されたことなど知る由もなかった。

明けて24日、ドイツ軍による空爆は激しさを増し、車両を確保した政府と軍のトップはひそかにモギリョフに向けて脱出する。当局の指示なく放置された一般住民もまた、パニック状態で逃走を開始した。爆撃を受けた建物が燃え上がり、街路には死体が転がっていた。しかし、このとき南方に向かった者たちの一部は脱出に成功したが、東方に向かった者たちはモスクワへと猛進するドイツ軍にたちまち追いつかれ、ミンスクに追い返される。空爆に

よる破壊の規模は、それまでドイツ中部方面軍が通過した都市のなかでは最大規模であり、戻っても住むところがない人々も多数であった。

6月28日、ドイツ軍本隊が市街戦を交えることなくミンスクに入場した。とはいえ彼らは、いよいよ「23年来ソヴィエト体制下にあった地域³⁾」にして、「ポリシェヴィズムの最初の前哨⁴⁾」に足を踏み入れたことを認識する。水道も電気も生活の基盤が破壊された街で、食糧を確保し、日常生活を回復させようにも、ドイツ軍司令部は、彼らをユダヤ=ポリシェヴィキからの解放者として歓迎する現地協力者を持たず、途方に暮れざるを得なかった。第II章で述べたように、1918年のベラルーシ人民共和国崩壊後、その残党は西へと亡命し、さらに1939年9月にポーランド東部領域がソ連に併合されると、それを嫌うベラルーシ人の一部がポーランドに向けて脱出した。軍事占領後の民政構築にあたり、ミンスクの軍司令部がひとまず協力者と頼んだのは、これらドイツやドイツ占領下のポーランドでナチ協力者となっていたベラルーシ・ナショナリストの亡命者である。彼らは軍あるいは特別行動隊B⁵⁾に同行して現地入りし、臨時の行政執行を委ねられた⁶⁾。しかし、彼ら亡命者は確かに現地語の話者ではあったが、すでに20年以上現地との接触を断たれた者たちであり、現地に残っていたかつての同志もわずかでしかなかった。

独ソ戦の直前、帝国保安本部長ラインハルト・ハイドリヒは、ドイツ軍に同行する4隊の特別行動隊の隊長に対し、占領地の共産主義者と共産主義の信奉者としてのユダヤ人の掃討を命じていた。しかし、ナチにとって、「23年来ソヴィエト体制下にあった地域」の住民は、すべて疑わしい者たちである。ミンスクでは、共産主義者と非共産主義者、ユダヤ人と非ユダヤ人を区別せず、一般住民の連行と占領政策の敵対者割り出しの試みは、特別行動隊Bの隊長ネーベならびに出撃コマンド7a, 7bが7月4日から6日にかけて到着するより前、現地の軍司令部によって開始された⁷⁾。

残された文書や証言が食い違うため、出来事の日付けや状況の詳細な再現は不可能だが、特別行動隊Bの報告によれば、兵役対象年齢にあたる18歳から45歳の男性⁸⁾は残らず、オペラ座前広場への出頭を命じられた。該当者のすべてが命令に従ったかどうか不明だが、出頭した男たちはいったん市北部の旧ストロジェフスコイエ墓地⁹⁾に集められ、さらにそこから順次、市の北

西5キロに位置するスヴィスロチ川沿いのドロズディに連行された。仮設のソ連兵捕虜收容所が設置されていたのと同じ場所である。しかし、急遽設置された捕虜收容所はこのとき、とりあえず敷地を縄で囲っただけの場所ではなかった。ミンスク・ビャウイストク間の戦場で捕虜となったソ連兵は30万人以上にのぼったが、7月8日にドロズディを訪問したベルリンのトート機関中央事務所の長ドルシュは、7月10日、ベルリンに宛て、ベルリンのヴィルヘルム広場ぐらゐの広さのところに約10万人の捕虜と4万人の民間人が詰め込まれ、身動きもできず、用便は立ったままその場で垂れ流されている、と報告する¹⁰⁾。周囲には耐えがたい悪臭が漂っていた。捕虜にはろくに水も食事も手当てされず、見張りのドイツ兵の暴行や発砲による死者も半端な数ではなかった。ミンスクから連行された民間人は捕虜とは別の区画に收容されたが、まもなく身内によるわずかな差し入れが認められた以外、飢えも渴きも暴行、発砲も、状況は捕虜と同様だった。

ドロズディ体験者による同時代証言¹¹⁾や特別行動隊の諸報告を合わせ読むと、ドロズディでの共産党員や政府高官など「破壊分子」の特定は、軍の秘密警察と特別行動隊の隊員により、ドイツで事前に用意された名簿や、現地の共産党本部や政府諸機関で押収した名簿、また現地で得たナチ協力者を用いて行われたが、上記のような混乱のなか、事は目論見通りに運ばなかったのではないかと思われる。結局、非ユダヤ人については、党の活動家等であったことが明らかになった者を除き、多くはミンスクに戻された。ユダヤ人については、有用人材である医師や技術者を別として、教員、大学教授、弁護士等の「インテリ」を中心に処刑が執行され、その数は7月13日までに少なくとも1050人にのぼった¹²⁾。7月9日から16日までの週間活動報告でネーベは、次のように述べる。

「ミンスクの民間人收容所になお残る2500人のユダヤ人については、選別が続行されている。もはやそのなかに知識人は含まれていないが、ユダヤ人の協力者によって約100人のユダヤ人共産党員や密偵その他の確保に成功し、本日、処刑された。まだ收容所にいるユダヤ人について、経済的に差し迫った労働にぜひとも必要とされるのではないかぎり、処刑が続行される¹³⁾。」

このときドロズディ近郊で殺害された者は、非ユダヤ人とユダヤ人を合わ

せて1万人ともされるが¹⁴⁾、正確なことは不明である。時期的には7月16日以後と推測されるが、最終的に殺害を免れたユダヤ人は、ミンスク市内のヴォロダルスカヤ通りの監獄(図1)に移動させられた。監獄内でのさらなる選別によって80人から90人が殺害され、残りの800人から1000人ないしはそれ以上の者が解放されたとされる¹⁵⁾。

以上が、ユダヤ人と非ユダヤ人の双方を襲った最初の虐待と虐殺のあらましかが、この間、7月13日には、ユダヤ人に対するナチ・ドイツの命令の執行機関となるべきユダヤ評議会が設立され、ゲッソー設置の準備も進められた¹⁶⁾。ゲッソーへの移動命令が出るのは7月19日である。しかし、破壊されたミンスクの行政執行を当面、誰に委ねるかという問題と同様、軍司令部は、ユダヤ評議会の人選をめぐるでも困難に直面した。というのも、ポーランドのようにユダヤ教徒やシオニストの諸団体が存在したところや、ソ連に併合されて間もないバルト三国など、まだそうした団体の痕跡が存在していたところでは、まずはそれら団体の長からユダヤ評議会の長を選べばよかった。



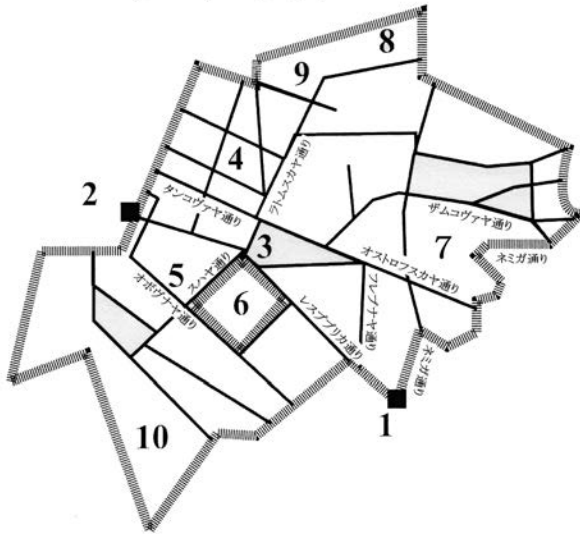
図1 ヴォロダルスカヤ通りの監獄
(2017年8月27日、筆者撮影)

だが「23年来ソヴィエト体制下にあった地域」では、そのような団体は跡かたなく解体されてしまっていた。本人による証言が残っておらず、本人を知る同時代人の証言もまちまちではっきりしないが、軍司令部がユダヤ評議会の長としてイリヤ・ムシュキンを見出したのは、ミンスクの路上であったとも、ドロズディの収容所であったともいわれる。いずれの場合も、ドイツ語を理解するユダヤ人を探した結果、偶然、行きついたのがムシュキンであったようだ。ムシュキンは、ミンスクで工業製品の売買を行う組織の副所長の地位にあり、組織管理能力を期待できる一方、共産党員ではなかったことも好都合と思われたのかもしれない¹⁷⁾。ユダヤ評議会のほかのメンバーの選出は、ムシュキンに一任された。

ユダヤ評議会に指示された最初の仕事は、氏名や家族構成、職業等が記されたユダヤ人台帳の作成である。はじめ登録は、ゲットー予定地区の外で、ユダヤ評議会が仮事務所をおくマシュウコフシチナ通りの建物前で行われ¹⁸⁾、登録をすませたユダヤ人には身分証明書が渡された。先に述べた監獄のユダヤ人の解放とゲットーの設置開始の時期的前後関係は、残された史料からははっきりしないが、おそらくゲットー設置の方が先であったと思われる。独ソ戦開戦時に14歳であったトレイステルは、はじめゲットーにいたのは子供と年配者だけだったと回想している¹⁹⁾。ゲットーとされたのは、ミンスクでもともとユダヤ人が多く居住していた地域で、空爆こそ免れたものの、1階建ての古い木造家屋がほとんどだった。(地図2)ユダヤ人のゲットーへの移動は8月1日までにほぼ完了した。以後ナチ・ドイツ当局により、ゲットーの外は「ロシア人地区」と呼ばれ、この呼称はゲットーのユダヤ人によっても用いられた。

この時点でゲットーに収容されたユダヤ人の数はどれほどであったのか。独ソ戦開戦後の混乱のなかで、どれだけの数のユダヤ人がミンスク脱出に成功し、他方で東進するドイツ軍に追われ、西ベラルーシからどれだけの数のユダヤ人が流入したのか。ゲットーの外で身を隠したユダヤ人がどれほどいたのか。すべて、正確なことは不明である。後述するように、ミンスク・ゲットーの抵抗運動ならびにユダヤ人パルチザン部隊を率いたヘルシュ・モラルは、1946年にモスクワで出版したイディッシュ語の回想記『ミンスク・

ミンスク・ゲットー



- 1 ゲットーの門
- 2 ゲットーの門
- 3 ユビレイナヤ広場
- 4 ユダヤ評議会
- 5 病院
- 6 特別ゲットー1
- 7 特別ゲットー2
- 8 孤児院
- 9 ヤマ
- 10 ユダヤ墓地

Phillip Alloy, The role of Jewish women as primary organizers of the Minsk Ghetto resistance during the World War II German occupation, The University of Toledo, Theses and Dissertations 6, 2013, p.xi より筆者作成

地図 2

『ゲットーから』において、ユダヤ評議会で行われたユダヤ人登録は完全というにはほど遠いと断りつつ、はじめゲットーには5万5000人のユダヤ人がいたが、後にミンスクの周辺地方に残っていたユダヤ人が連れてこられたことにより、その数は8万人に増加したとする²⁰⁾。しかしながら第IV章で述べるように、1942年1月のはじめのドイツ側文書は、ほぼ一致してゲットーの現地ユ

ダヤ人収容者の数を1万8000人程度としている。ゲットー設置から1942年はじめまで、8月14日から9月1日、11月7日から11日、また11月20日にまとまった人数のユダヤ人が殺害されたが、犠牲者数を過大に推定する傾向があるユダヤ人の同時代証言に基づいても、その規模があわせて5万から6万人にのぼったとは考えられない。ドイツ側の史料に基づけば、上記以外にゲットーで日常的に発生した個別の殺害や病死、衰弱死等を加えても、この間の犠牲者は2万人程度ではないかと推定される。したがって、1941年夏のゲットー収容者数が8万人とは考えにくく、ここでは一つの妥当と思われる推定として、レントロプの4万5000人から5万人という数字を採用しておきたい²¹⁾。

2. ゲットー抵抗運動の組織化

スモラルがミンスクにたどり着いたとき、ユダヤ人はゲットーへの移動の最中だった。スモラルは1905年にポーランドのザンブルフで生まれ、ソ連の大学で学んだ後、1928年から再びポーランドでコミンテルンのエージェントとして活動する。第二次世界大戦が始まると、ソ連支配地域に入ったピャウイストクへと逃走し、独ソ戦開戦後、さらにミンスクへと逃走した。ユダヤ評議会での登録のさい、少なからぬ共産党員や政府高官が危険な過去の経歴を隠すため、策を弄して偽の身分証明書を手に入れたが、スモラルもまた偽名イェヒム・ストリャレヴィチと記された身分証明書を手にした。そして、この別人に成りすましたスモラルを中心とするゲットーの抵抗運動と、ロシア人地区の非ユダヤ人の抵抗運動は、ソ連的メンタリティを共有しない者には何ともわかりにくい「躊躇」を伴いながらも、動き始めることになる²²⁾。

まずゲットーについていえば、スモラルを苛立たせたのは、ソ連時代に人々が身につけた当局の指示があるまで迂闊には動かないという態度である。これは、共産党独裁のもとでの保身術であったが、加えて少なからぬユダヤ人が、ナチの言うことを聞いていれば命だけは助かり、そのうち戦争が終わると楽観していたことにもよる。ポーランドにいたスモラルと異なり、独ソ不可侵条約締結後、ドイツにかかわる情報から遮断されたベラルーシの人々は、ナチの危険を十分認識していなかった。そこでスモラルは、ユダヤ評議会のメンバーの仲介でゲットー内の病院(図2)のボイラーマンの仕事にありつき、

病院地下室で寝場所と病人食の配食という最低限の寝食を確保すると、みずから行動を起こすことを決意する。かつての党の関係者など、ミンスクの知己を通じて信頼できる仲間を集め、最初の会合を開いたのは8月17日の日曜日だった。いつも通りであれば、ナチが日曜日に大規模な行動を起こすことはなかったからである。場所は、ゲッソーの中心のユビレイナヤ広場(図3)近くの建物の一室で、ユダヤ評議会事務所からも近く、頻繁な人通りに紛れて人の出入りが目立たないところだった。集まったのは、ミンスクの地理に通じた地元のユダヤ人が2人、スモラルを含めてポーランド出身者が2人、残る1人はオデッサの出身であり、ほかに会合には出席しなかった仲間が3人いた。ワルシャワ、ヴィリニユス、カウナス、ピャウイストク等のゲッソーでは、はじめ抵抗運動は、シオニストやブンディスト、コミュニストなどイデオロギー的対立関係にある政治的党派や、あるいは宗教的党派ごとにわかれて結成され、それらが統一された運動にまとまるまで一定期間を要した。



図2 スモラルが潜んだ病院
現在は音楽学校になっている。
(2017年8月27日、筆者撮影)



図3 旧ユビレイナヤ広場
現在は公園になっている。
(2017年8月27日、筆者撮影)

これに対してソ連時代にそのような党派が消滅したミンスクでは、抵抗運動ははじめから一つだった。会合で合意された彼らの行動指針は、第1に、「ゲッターは死だ！ ゲッターの壁を破れ！ ゲッターを脱出せよ！」をスローガンとして²³⁾、ユダヤ人に迫りくる危険を認識させ、逃走を促すこと、第2に、ゲッターの外に人を送り、ユダヤ人が隠れ、生き延びることができるような場所を探すこと、の2点である。後者の実現のためには、ゲッター外の信頼できる非ユダヤ人とコンタクトをとり、彼らと連携して運動を進めることが必要だった。

一方、ロシア人地区で動いていたのは、スラヴェク、本名イサイ・カジニェツとその妻ローラである。カジニェツはソ連支配下のピャウイストクで石油関連事業の技術者であったが、独ソ戦開戦後、スモラルと同様ミンスクに流れ込んだ難民の1人だった。ゲッター内外のスモラルとスラヴェクを結びつけたのは、スモラルが働く病院の事務職員ゲルツィクの17歳の息子ダ

ヴィド、別名ジェンカである。ジェンカはユダヤ人だが、イディッシュ語訛りのないロシア語を話し、外見もユダヤ人のようには見えなかった。彼はロシア人地区に潜み、学校仲間と組んでナチとの闘いを誓い、スラヴェクらのグループの一員ともコンタクトがあった。

ロシア人地区で実現したスモラルとスラヴェクの面会時期は、スモラルの回想記にはゲッター設置から数か月後としか記されていないが、おそらく10月末か、遅くとも後述の11月7日のアクションの前である。軍司令部の当初の予定と異なり、ミンスクのゲッターにはレンガ壁は作られず、周囲を鉄条網で囲っただけで監視塔もなかった。そのため、特にゲッターがユダヤ人墓地(図4)(図5)と接するあたりでは、鉄条網を細工し、草木でカムフラージュすれば、人ひとりが通れるほどの抜け穴を確保することは可能だった。実際、ミンスクのホロコースト生存者の回想記を読むと、見つければ命の危険を伴



図4 旧ユダヤ墓地
1960年代に最終的に破壊され、現在は公園になっているが、わずかに墓石が残っている。
(2017年8月27日、筆者撮影)



図5 旧ユダヤ墓地内のホロコースト記念碑
(2017年8月27日, 筆者撮影)

うものの、人々はパトロールの隙を突き、鉄条網を掻い潜って街に出て、物乞いや物々交換あるいは知己を頼ってなけなしの食物を調達していたことがわかる。この調達で活躍したのは、身体が小さく敏捷な子供たちだった。ス

モラルがゲッターから抜け出すのに使ったのも、ジェンカがゲッター内に住む家族とロシア人地区の自分の住処との往復に使っていた穴だった。

ゲッターを出たスモラルの目に外の世界の正常性は奇妙に映ったが、他方でスモラルを見つめるスラヴェクらの目に、スモラルはあらゆる正常性を失った飢えと死の恐怖の世界から来た異人のごとく映ったようだったという。いずれにせよ2人は直ちに互いを信じたが、スラヴェクには自分がロシア人地区の抵抗運動を率いるという意識はなく、スモラルに発せられた問いは彼を愕然とさせるものだった。すなわちゲッターでの抵抗運動の成立とロシア人地区からの助けの必要を説くスモラルに対し、スラヴェクが真っ先に尋ねたのは、ゲッターの組織が誰の命令で結成されたのかということ、スモラルが誰の命令で動いているのかということだ。スモラルは、危機に直面しているわれわれは自発的に組織を立ち上げねばならないと主張するが、スラヴェクは、その場合、「もし、すでに街[ミンスク]に上から権限を与えられた地下抵抗組織が存在しているとわかったら、どうなるのか。われわれは、組織を設立し、指揮する権力の篡奪者のようなことになってしまわないか²⁴⁾」というのだ。

結局、「上」に対する権限侵害の恐怖を払拭できないスラヴェクがとった安全策は、ミンスクにベラルーシ共産党が指導する地下抵抗運動の存在を前提し、その上で、自分たちの運動をあくまでもその下に位置し、それを補助する「補助委員会」と位置づけることである²⁵⁾。実際には、ベラルーシ共産党第1書記のポノマレンコなど、共産党の幹部はミンスクを脱出しており、この時点では党が指導する地下抵抗運動など存在しなかったが、補助委員会は、正式には「ベラルーシ共産党第2市委員会」、あるいは「第2」を「補助」と置き換え「ベラルーシ共産党補助市委員会」と呼ばれた²⁶⁾。(以下、本稿では市委員会と略記する。)スラヴェクをリーダーとする市委員会のもとに、鉄道労働者やもとの政府職員、工場労働者や知識人等、それまでロシア人地区で別個に動いていた抵抗者のグループがまとまり、ゲッター内の抵抗運動も市委員会指揮下の一組織と位置づけられる。ゲッターでは、スモラルの指揮のもとで10人が「細胞」とよばれる班を構成し、細胞間ならびに組織中央とコンタクトを持つのは細胞のリーダーに限られた。細胞の一般メンバーには、ほかの班で誰が活動しているか、一切知らされなかった。細胞の誰かが逮捕されたと

き、その波及が同じ細胞の10人を超えないようにするためである。スモラルによれば、後述の11月7日のアクションの直前で10の細胞が活動しており、ほかにも運動に協力する若者のグループが存在した²⁷⁾。

ユダヤ評議会に対して、はじめスモラルはナチの協力機関とみなし、警戒心を隠さなかった。彼にユダヤ評議会との連携を促したのは、すでにユダヤ評議会とコンタクトがあったスラヴェクであったという。ナチ・ドイツの命令の執行機関であるユダヤ評議会のメンバーが抵抗運動に加われば、ドイツ側の動きを迅速につかめるメリットが大きい一方、メンバーにナチ協力者がいれば、逆に抵抗運動側の動きが筒抜けになる危険もあった。スモラルの回想記には出来事の日付けがほとんど記されていないため、これについても時期の特定は困難だが、スモラルとスラヴェクの最初の会見から2～3週間後、おそらく11月末あるいは12月はじめに、今度はスラヴェクがゲッターに潜入して、スモラルが住処とする病院内で2度目の会見が行われた。以後、病院はゲッターの抵抗運動の拠点の一つとなる。そのさい、あらゆる便宜を提供したのは院長のクリクである。ゲスターポは、感染を恐れて伝染病棟には近づかなかった。そして2度目の会見と同時期に、ゲッター内のスモラルの組織とユダヤ評議会とロシア人地区のスラヴェクの市委員会の三者のあいだで、抵抗運動のネットワークが構築されたものと推測される。偽造されたロシア人の身分証明書を持ち、ゲッターの内外を行き来してゲッター内の抵抗運動と市委員会との連絡役を務めたのが、ミハイル・ゲベレフ(図6)や、2児の母であったハースヤ・プルスリナらである。ゲベレフとプルスリナはともにミンスクの共産党員であり、党員としての人脈がロシア人地区で彼らの活動を容易にした。さらにまた、実はスラヴェク自身がユダヤ人であったことも、ユダヤ人には幸運であったといえるかもしれない。当時スラヴェクがユダヤの出自であることは、ごく近親者以外に知る者はいなかった。この事実が明らかにされたのは、戦後1969年に、ミンスクの対ナチ抵抗運動を記念するドキュメンタリー・フィルムの作成が開始されたときである²⁸⁾。

ゲッターのユダヤ人は、ゲッター外の軍需工場その他で労働力として使用されたが、上記の連携により、同じ工場内で抵抗運動にかかわるユダヤ人、ロシア人、ベラルーシ人の連携も成立した。こうして形を整えた抵抗運動に



図6 ゲベレフ通りのミハイル・ゲベレフのレリーフ
レリーフの下には、次のように書かれている。
「この通りには、大祖国戦争期ミンスクの反ファシスト地下運動の組織者にして指導者、ミンスク・ゲッターのベラルーシ共産党(ポリシェヴィキ派)地下活動部書記であるミハイル・リヴォヴィチ・ゲベレフの名がつけられている。彼は1942年8月15日にゲスターポによって処刑された。」
碑文にあるとおり、通りの名は、レリーフが設置された2015年10月にメーベリ通りからゲベレフ通りに変えられた。
(2017年8月27日、高尾千津子氏撮影)

において、スモラルのグループがまず手掛けたのは、ミンスク市内の地下印刷所でのロシア人あるいはベラルーシ人になりすますための身分証明書の偽造、殺害対象者から外される可能性の高い専門技術労働者であることを示す証明書の偽造、さらに抵抗運動にかかわる者たちに戦況その他を伝える情報誌の印刷等である。また第IV章で述べるように、この時期、ミンスク南方のルデンスクの森に拠点を置くパルチザン部隊とのコンタクトを皮切りとして、ミンスク近郊で展開するパルチザン部隊とのコンタクトも徐々に広がり、市内の軍需工場から盗み出された拳銃やライフル銃や弾丸、ゲッター内で稼働する作業所から盗み出された衣服、靴、手袋等は、森のパルチザン部隊のもとへと運び出された²⁹⁾。

注

第1章

- 1) それぞれの都市でのボグロムの発生経緯については、以下を参照。重松尚「リトアニア臨時政府(1941年)——「抵抗」の歴史とその記憶」(橋本伸也編『せめぎあう中東欧・ロシアの歴史認識問題——ナチズムと社会主義の過去をめぐる葛藤』ミネルヴァ書房, 2017年, 所収), 野村真理「自国史の検証——リトアニアにおけるホロコーストの記憶をめぐって」(野村真理・弁納才一編『地域統合と人的移動——ヨーロッパと東アジアの歴史・現状・展望』御茶の水書房, 2006年, 所収), 同「1941年リーガのユダヤ人とラトヴィア人——ラトヴィア人のホロコースト協力をめぐって」(前篇)、『金沢大学経済論集』第30巻第1号, 2009年)「1941年リーガのユダヤ人とラトヴィア人——ラトヴィア人のホロコースト協力をめぐって」(後篇)、『金沢大学経済論集』第30巻第2号, 2010年), 同『ガリツィアのユダヤ人——ポーランド人とウクライナ人のはざままで』(人文書院, 2008年, 第3部第2章)。
- 2) *Die Verfolgung und Ermordung der europäischen Juden durch das nationalsozialistische Deutschland 1933-1945*, Bd. 7, Bert Hoppe und Hildrun Glass (Hg.), *Sowjetunion mit annektierten Gebieten I*, München 2011 (以下, VEJ, Bd. 7と記す), Dok. 32, S. 195.
- 3) Ereignismeldung UdSSR, Nr. 67, 29. August 1941, in: Klaus-Michael Mallmann, Andrej Angrick, Jürgen Matthäus, Martin Cüppers (Hg.), *Die »Ereignismeldungen UdSSR« 1941. Dokumente der Einsatzgruppen in der Sowjetunion*, Darmstadt 2011, S. 369. (以下, 同史料集からの引用は簡略にEreignismeldung UdSSR, Nr. 67, 29. August 1941, S. 369.と記す。)
- 4) 筆者がサーベイできるのは英語, ドイツ語, 日本語の文献に限られるが³, ミンスクのホロコーストを論じた数少ない先行研究として, 比較的最近出版されたものに以下の2点がある。まずPetra Rentrop, *Tatorte der „Endlösung“. Das Ghetto Minsk und die Vernichtungsstätte von Maly Trostinez*, Berlin 2011は, ナチのユダヤ人政策が絶滅政策へとエスカレートしていく過程を, ミンスクという事例において丁寧に検証した手堅い研究である。他方でユダヤ人の抵抗運動等には, わずかなページしか割かれていない。

これとは対照的に, ゲッソーのユダヤ人の抵抗運動の成立, 展開とその成果に焦点をあてたのが⁴, Barbara Epstein, *The Minsk Ghetto 1941-1943. Jewish Resistance and Soviet Internationalism*, Berkeley/Los Angeles/London 2008である。ナチ・ドイツがみずからの行動を日誌や報告書に書き残したのに対し, ユダヤ人の抵抗運動にはそのようなまとまった文書史料は存在しない。そのためエプスタインの研究が主として依拠するのは, ホロコーストを生き延びたユダヤ人の回想記や, エプスタイン自身によるホロコースト生存者へのインタビューによって得られた証言である。しかし, オーラル・ヒストリーの常識として, このような回想記や証言で語られる「事実」は, 当事者しか語ることでできない貴重な「事実」を含む一方, 同時代の噂や後代に得ら

れた情報も混ぜ合わされつつ証言者によって書き換えられた「事実」も多々含む。したがって、証言者が語る体験を無批判に普遍化したり、彼らによって再構成された記憶を文字通りの「事実」として採用するのは危険を伴う。オーラル・ヒストリーにおいては、証言を可能なかぎり他の史料と突き合わせ、事実関係を検証する作業が求められるが、シュテファン・レーンシュテットも書評で述べているように (<http://www.sehepunkte.de/2011/01/16085.html> 2017年6月28日閲覧)、この点、エプスタインの詰めはかなり甘い。

またエプシュタインは、ソ連時代に涵養されたコスモポリタニズムが、抵抗運動においてユダヤ人と非ユダヤ人の連帯を成立させ、それが1万のユダヤ人のゲットー脱出を可能にしたとするが、以下、本稿で述べるように、エプスタインが手放して称賛するこの連帯にもさまざまな限定が必要であり、1万人という数字も再検討を要する。加えて、レーンシュテットの書評も、キャサリン・エプスタインの書評 (<http://www.h-net.org/reviews/showrev.php?id=25712> 2017年6月28日閲覧) も等しく指摘するように、エプスタインの著作には、同じ事柄がしばしば同一の文章で繰り返し述べられる箇所が多く、場合によっては繰り返し述べられる同じ出来事の日付けが述べられる場所によって異なることもあるなど、著述に粗雑さが目立つ。ユダヤ人の抵抗運動については、ほとんどエプスタインの著作にしか再録されていない貴重な証言もあり、問題意識において筆者は同書から刺激を受けたが、先行研究として依拠するには慎重にならざるをえなかった。

第II章

- 1) Steven L. Guthier, *The Belorussians: National Identification and Assimilation, 1897-1970*, in : *Soviet Studies*, Vol. XXIX, No. 1, 1977, p. 43.
- 2) *ibid.*, p. 45.
- 3) *ibid.*, p. 46.
- 4) Elissa Bemporad, *Becoming Soviet Jews. The Bolshevik Experiment in Minsk*, Bloomington/Indianapolis 2013, p. 28. []内は引用者による補足。以下、同様。
- 5) Guthier, *op. cit.*, p. 45. ここでのユダヤ人はイディッシュ語使用者である。
- 6) Leonid Smilovitsky, A demographic profile of the Jews in Belorussia from the pre-war time to the post-war time, in : *Journal of Genocide Research*, 5 (1), 2003, p. 120.
- 7) Nicholas P. Vakar, *Belorussia. The Making of a Nation*, Cambridge, Massachusetts 1956, p. 139.
- 8) Bemporad, *op. cit.*, p. 44.
- 9) Cf. Arkadai Zeltser, Inter-War Ethnic Relations and Soviet Policy: The Case of Eastern Belorussia, in : *Yad Vashem Studies*, Vol. 34, 2006.
- 10) Guthier, *op. cit.*, p. 273.
- 11) Bemporad, *op. cit.*, p. 91.

- 12) Projektgruppe Belarus im Jugendclub Courage Köln e. V.(Hg.), »*Existiert das Ghetto noch?*« *Weißrussland: Jüdisches Überleben gegen nationalsozialistische Herrschaft*, Berlin/Hamburg/Göttingen 2003, S. 161f.
- 13) Ebd., S. 132f.

第三章

- 1) Rentrop, a.a.O., S. 58.
- 2) Projektgruppe Belarus im Jugendclub Courage Köln e. V.(Hg.), a.a.O., S. 117.
- 3) Ereignismeldung UdSSR, Nr. 23, 15. Juli 1941, S. 122.
- 4) Rentrop, a.a.O., S. 67.
- 5) 独ソ戦において特別行動隊はABCDの4隊にわかれ、北部方面軍にはA、中部方面軍にはB、南部方面軍にはCとDが同行した。しかし、7月11日付けのEreignismeldung UdSSR, Nr. 19で修正が明らかにされるように、7月はじめまで中部方面軍のネーベ指揮下の特別行動隊がC、南部方面軍のオットー・ラシュ指揮下の特別行動隊がBと記された。本稿では混乱を避けるため、独ソ戦開戦時に遡ってネーベ指揮下の特別行動隊をBで統一する。
- 6) Ereignismeldung UdSSR, Nr. 21, 13. Juli 1941, S. 113. Cf. Leonid Rein, *The Kings and the Pawns. Collaboration in Byelorussia during World War II*, New York/Oxford 2011, p. 100f.
- 7) *Die Verfolgung und Ermordung der europäischen Juden durch das nationalsozialistische Deutschland 1933-1945*, Bd. 8, Bert Hoppe (Hg.), *Sowjetunion mit annektierten Gebieten II*, Berlin 2016(以下、VEJ, Bd. 8と記す)所収の1942年9月21日付けのハンナ・イスラエレヴナ・ルビンチクの回想記(Dok. 187, S. 422)によれば、出頭を命じる司令部令が出たのは7月2日である。
- 8) Ereignismeldung UdSSR, Nr. 20, 12. Juli 1941, S. 109.
- 9) 墓地は1937年に解体された。
- 10) Rentrop, a.a.O., S. 69.
- 11) VEJ, Bd. 7, Dok. 72, VEJ, Bd. 8, Dok. 148.
- 12) Ereignismeldung UdSSR, Nr. 21, 13. Juli 1941, S. 113f.
- 13) VEJ, Bd. 7, Dok. 32, S. 196. 7月24日付けの「事報ソ連」には、「ミンスクでは、ユダヤ人のインテリ層すべて(教師、教授、弁護士等、医師を除く)が処刑された」と記されている。(Ereignismeldung UdSSR, Nr. 32, 24. Juli 1941, S. 172.)
- 14) Christian Gerlach, *Kalkulierte Morde. Die deutsche Wirtschafts- und Vernichtungspolitik in Weißrußland 1941 bis 1944*, Hamburg 1999, S. 508.
- 15) Rentrop, a.a.O., S. 74f.
- 16) Ereignismeldung UdSSR, Nr. 21, 13. Juli 1941, S. 114.
- 17) VEJ, Bd. 8, Dok. 210, S. 495.
- 18) Hersh Smolar, *The Minsk Ghetto. Soviet-Jewish Partisans against the Nazis*, New York

- 1989, p. 16.
- 19) Projektgruppe Belarus im Jugendclub Courage Köln e. V. (Hg.), a.a.O., S. 134. See also Smolar, op. cit., p. 16.
 - 20) .15 .ט, 1946 מאסקווע געטא, פון מינסקער געטא, סמאליאר, ה. סמאליאר, a.a.O., S. 113f.
 - 21) Rentrop, a.a.O., S. 113f.
 - 22) 以下, 抵抗運動の組織化については, Smolar, op. cit., p. 23-37に詳しい。
 - 23) *ibid.*, p. 30.
 - 24) *ibid.*, p. 36.
 - 25) *ibid.*, p. 37.
 - 26) Epstein, op. cit., p. 130.
 - 27) Smolar, op. cit., p. 40.
 - 28) Reuben Ainsztein, *Jewish Resistance in Nazi-Occupied Eastern Europe with a historical survey of the Jews as fighter and soldier in the Diaspora*, London 1974, p. 484. Epstein, op. cit., p. 122.
 - 29) VEJ, Bd. 8, Dok. 210, S. 496.

[付記] 本稿は, 科学研究費・基盤研究(C)・課題番号17K03167および基盤研究(B)・課題番号16H03494による研究成果の一部である。